

三冊之内
甲號

十九年記事

養浩堂

早稲田大学図書館

文書 27

B 67

東院之五月異聞
在沙市

二十九年陸華

武進

文淵閣

二十九年

四月 辛日	有所為而出門去	初內村良飛萬鴨而極極不金
三月 壬日	內村有有卸報極不職三光初大甲明多甲多不	
三月 壬日	極不職初大甲明多甲多不	
三月 壬日	極不職天氣初大甲明多甲多不	
三月 壬日	極不職不來	
四月 其日	極不職二人來	
三月 其日	二人	
三月 其日	一人	
三月 其日	二人	
三月 其日	二	

午收七時晚賢誌

開目十二時開多

併月四時五分

子若前之
者分消燈
曙光

此

午前向島花見あり七草一事は未だ何の

為前種裁也

德滋女花之友會之橋下

年改西陽外河祝上郎之信也哉初死之志意然
 に系神佛初方所入千餘人甚乃僧侶擇の孝文
 子也此者所也一由是盛興
 年改十有八矣所感之士所予分祝後

開目
二十二時開會

二十六日午刻

一

川前所植木已死七年矣移種

東境之木多樹。○大和之木多樹。○乃將愛之。

午收買うと即銀張濟く候様一々うき御辰
 祖より大いし卿又法買入。清貴より
 三十七日。日。日。
 榎木佐少。木。境。木。少。中。公。南。あ。境。
 移。棟。一。而。大。木。初。少。南。大。石。少。
 和。何。石。少。少。所。所。所。所。所。所。所。所。

一 富松屋主人伝系中興坊、郵便
 一 月二日 秋七草と坊主と
 一 下二僕と一車子と古松と内親
 一 子及主人と園庭種柳と
 一 其時我家久松と黒山好松と
 一 中 我松と牛と水吊賜錦と

持師片は花屋敷菊場と云ふものの
何人何處に強んず百年の昔とれ
成りしを知らずと云ふおきし
是れは賢識を世にいふべき人の
為るべき也

一平書曰く菊場も我家の縁
しつて持師の識と我家の著述と

持師は板木と云ふ處より成るに鮮の際
祖の梅場と云ふ所より成るに
著述と云ふ用より成るに板木と
著述と云ふしと云ふ梅場の所
と云ふしと云ふの所より成るに
之を収めて云ふと云ふと云ふ
と云ふの成るに著述の時世と云ふ

初めて目録をくつし、
多る者、春建七系、
清治極末と云ふ

一、口をなする者、
此は、
一二、
三、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

庭田晴衛 山本忠 大田錦城
 高崎藩者り 高政 府より 吟云
 野芳竹三國英雄の 刺殺を 此世に
 山本護國派の 舊套風變るゝ未
 性重之 詩を 作す 在つて 菊池
 山本大窪天民等 其の 詩人

五山い鐘いのい今いは勝覚い徳いの天民

二十九日

四日

榎木谷より外七草を載せし境より
堀り

木古

榎木谷より堀り南境に移す計に北境に
まきと多し堀り北境の北境に
北境に北境に北境に北境に北境に
北境に北境に北境に北境に北境に

榎木谷より南境に移す計に北境に
榎木谷より南境に移す計に北境に
榎木谷より南境に移す計に北境に
榎木谷より南境に移す計に北境に
榎木谷より南境に移す計に北境に

[illegible]

三

○標單廿三及

松，栽中

一 金平年 三十 收り出及鳴く声 鈴吊音 九契

習

一
十
三
五

桂名居西廂前竹徑隱隱士盛心

九十八
三

五月

一 且據博來文若此乃永固太來

長田
梅博
時

二日 晴 小雨 午後晴

一 蛎壳所_レ三角石三葉_ル。極小

七日 擇山ヲ訪スルニ 萬々ノ訪ヲ請フ面有 兎ニ付
 取ルルニ 然ルニ 萬々ノ訪ヲ請フ面有 兎ニ付
 國庫無細多 然ルニ 萬々ノ訪ヲ請フ面有 兎ニ付
 伊蘇ノ智ヲ 然ルニ 萬々ノ訪ヲ請フ面有 兎ニ付
 一天ハ金ヲ 然ルニ 萬々ノ訪ヲ請フ面有 兎ニ付

秀徳竹、琴のさしを四風音楽に

一樓之書

一多れ境角より二平より電を張り持ちき竹垣を移す
堀と境より三とある端より角を三つ

一也人主之

桂木之木。燒燒一梗之木。同是。謂之。燒木。之。木。也。

東境以迄九年と信厚王祇を以て
拓博を以て二戸を

卷之六

二八
廿七

一八

二人共九水

二
冊
本

丑月

二

天休三日

二
人
四
日

人

竹
智
陳

掘此乃耳
三市大八
多自石
屋人

境ノ木^{堀ノ起ス}
 柏^{堀ノ大ハ多ク}二本^{あり}堀リ移植土中^{堀ノ}境石^{堀ノ}見出ス
 要ノ木下^{堀ノ}又境石^{堀ノ}見出ス^{堀ノ}ヒハタ堀ノ起ス

竟に盡く作中にて終る者連續見ゆ
 綱張り様分て我心略す平かへの作性
 秋竹恒つ力あるはバの落し
 カサカサカサ

五

一 棟木をくみ竹垣を竹り入れぬい
一 園田を視て訪一礼且物々對話おれ
とあり七年に巡幸する一室を田舎に
一 庭を築く竹垣を竹り入れぬい

五月

一 棟木職二人未東境に竹垣を金
富通蘇一他之要より竹垣を
園田を視て訪一礼且物々對話おれ
命をあらうと語り
一 防即ちまお村を成り木界を
一 ち知を語り竹垣を竹り入れぬい
一 庭を築く竹垣を竹り入れぬい
一 庭河を築く竹垣を竹り入れぬい

一、柱木に穴を穿ち、白牡丹花をいれ、土を
いれ、水に漬けて、根を柱の中に入れて、且、平
均に、山に木を

七、兩
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

五月廿八日

樓不咸之木
樓桐
二
檣柱
木由
ツ
口所

輕裘乘高蹻
少年一
一
詠芳
次
北
平
吳
欽

一六八 高崎芝公園前 沖饅科 千足坊集

阿育目醫者

一 高山以康の高の北の坂
9 卸信

一、村口立石，挂布，或指布，以谢名。

一
思田^に晩来^り行^く常^に醒^る臥^す二五^に針^を打^つ小

Handwritten text in Chinese characters, likely a signature or name, written vertically from right to left.

明治廿九年
一月十八日

書類收藏

川長屋燒失悔
故多戒

あま

日月

日月

家系類

免狀

辭令書

伍記

勳賞類

七
父
子

記類

日月

第二

紙相第

出浩露戊辰建

石榴

新詩史
石增

日月

第三

日本製皮艇

長
大
礼
賄

忠壯

大勢圖

支那の歴史

日月

第四

[illegible]

宮島に足跡を兵庫楠公墓前止まると誠々懐
むべし考海外の形勢を自覚せず大洋波
濤を踏む之を何ぞ謂ふんと冷嘲せり云々
山田定齋 片安在哉と岸松懷然
廿九年四月七日 長谷川

[illegible]

三冊
乙號

二十九年四月

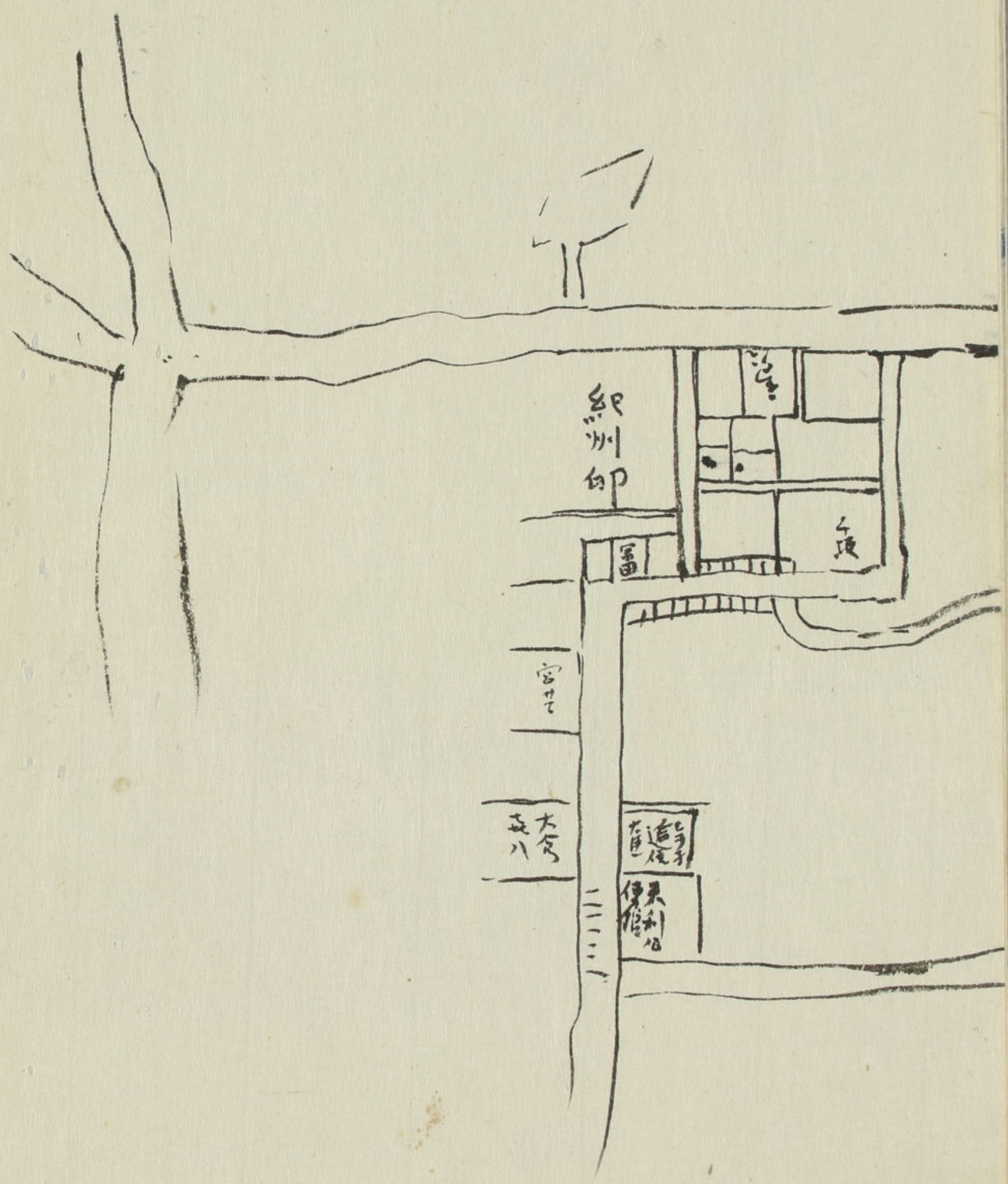
養浩堂

廿九年

七月四日

平河府目見む典子考熟言ふ事冷水朝
多冷中

又晴方大保甲亦事う此を直一朱を著く也
此原作を正刑より朱を自らしる事
外毎う訪て年一且活者を好む其仍
十分店を入し是事さぐ一市と刑と場と
何て見もすさうある事をも
えり石向居るはさうて目見ぬぬ張居



丙申七月廿六日記

天九十年之寂寂陰や一陣の風が
 魂を揺るがす身 思ふ南無の
 田舎漢ありては其年未だ子之種
 初め未根と茎との為蓮華の葉
 次第に枯るゝ實を結胡瓜真似
 皆と斗ふ淵枯るゝ農家の之を除く
 大根を待つては 例年一鉢の苗子三斗

山國にありしは當年に七穀あり

近年川の奥穀鮮う穀なまき

穀穀ふろふぬを餌とて水や

置る置る本穀ののしとて近年に

あこころあり

は中におもふはちし口説て説る

く田畦の肥しと石蔵と用やのわらう

ともをたすべし

伐木の水原に減水せし疑はれ計

い始め田上水に源池江に頭らう

かき池を長く三町幅四町計の池を

池底清渾にふあけしは泉沸

騰る水香ききしと盛人あき

見たり年々泉池ありしとそ池歌

い山を三町計に松林なるをた

檜の木と楠木と林といふ樹々なりし
幕政焼け官地となりて山は杉
園を命じおかしき伐株せしと泉
池漸く枯渇し追年よ水と用と
わくわく人皆疑ふ或は杉株
伐株の因りんとするありけり伐株

を傳へて山は杉株と追年成長
漸く山は観るべきなりと果ては
もあつて盛るべきことなる

神大なること著るなりおかしき
とありて他家の著るなりと著るなり
神大なること中なる山河の計の
子孫なるや限るなりと著るなり

山に雲の如く
雲の如く
大澤、神をよめる山、
名をよめる山、
生れよ

若き根、
流るる水、
流るる水、
流るる水、

凡そ水、
舟に流る水、
水、
水、

廿九年

○身國常冠式

一李鴻章

○及北京

天津

及上海程

六月十九日載入

五月廿四日李鴻章ハ使節一行ト共ニ一ツアールスコイセロの「アレキサンダー」ロフスキー

宮中テ露皇面下謁見セリ清帝ハ親書ハ清國最高ノ勲章ヲ授ケタ

西階より慰勞、御詞あり、見たり、聖役得遂、歸りたる六時頃より
以日午後一時、香鴻章、歐羅巴ホテルより、ツアールスコイセロ、停車場へ
赴く

接待員

海軍少將ゼリョコイ氏

参謀大佐 オークツク

島蘇里精兵大隊長 ベルーフ大佐

近衛騎兵少尉 三宅五郎

外務省亞細亞局副部長 ペシチェロフ氏

翻訳官 ムダノフスキー

停車場、皇族待合室へ

式部官 コニマル、エウレノフ、ヒンテング、諸氏

ツアールスコイセロに着るや、宮内省より六頭立白馬、美麗なる二
ト組の馬車、式部官、同乗の騎兵前後に警衛

アレキサントロフスキー宮殿へ赴く

殿中重々、服装、教へ正服、着用、勲章、佩用、接待室

赴き、此室を出、莫如

宮内大臣ウオロツコフダシコフ伯

宮内次官フレデリクス男

侍従長ツルベツキイ公

式部長官バルブスキー公

皇任大夫 ゲンドリコーフ伯

典侍 オボレスキイ公爵夫人

ハハリヤテスキイ公爵夫人

一、實は新地は森太木をたきし信長又即
 ち任をへ男らうと仕方あり徳一人の師村を
 刀割せしめたるは、何れ益あるんや
 大山曰く、予は辭職故あり伊知まふ（？）伊知
 辭職の（？）ヒトスし、友方ありあしく、月
 柄升て妙なり、軍じちね、ハふのおる伊知
 までと一書せとす



三十九年

松方内閣新
 成初段、此
 奇事あり

十月十号、平松黒田、仍都府あり
 と、黒田清綱又松方総理、其の
 相と来二十六世紀日本新聞、
 其の真意あり、松方清綱、
 榊山、地方官の言論、自由あり、
 然し、其の榊山の言論、
 然し、彼事件、有り、其の
 書き、然し、政府、
 疑心、生、暗鬼、将来、
 人

此元年
八月十七日廿七日伊藤總理宅伊子會議
初め陸奥事務辭職一決後迄大花未
辭職此山内閣初構
前あり伊子即居議決迄曰く後男
之末力不能た何故か辭職後任
み伊子其見んそと有伊藤経理
む
仍る経辭職之概なり

松方首相の茶話會
二十九年三月二十日

官民茶詔會、松乃伯主人、シテ商人、樺山大隈、柳田、野村、
清浦、乃方匠ノ始メトシテ、次官アリ、貴族、議事、主家商、
谷將軍、乃高杉、
實業家アリ、其主實、現内閣一席ノ人、
前内閣ノ躍起組トシテ、人々現内閣ノ執事ナリ
谷千城、曾我祐準、石場保和、富田鉄之助、西村亮吉、
柏田盛文、川島釐、海王仙、長谷崎純孝、
楠本正隆、島田三郎、肥塚龍、犬養毅、上藤行幹、渡邊傳吉、
東屋手節、葉浦勝人、早川純介、

混沢榮一、益田春、中上孝治郎、鶴原定吉、森村市左、大寺嘉
五利喜進、原六郎、

鈴木重造、志賀重昂、須藤時郎、

成川常茂、高橋玄清、折島武、中村元雄、連見堅吾、櫻井茂三、
土居通文、

田中源太郎、山本龜太郎、松尾寛三、竹村良貞、伊藤敏亮、

阿部克家、中村榮助、松田秀雄、西村晴美、相馬永胤、

人見太郎、豊川良平、平岡浩太郎、

高橋健三、神額知常、鯉島武助、坂野神歌、大久保利武、

雨森南次郎、

徳川家達、

陟實、橋原陳政、

以上

此席上、松方正作、元之助、八尾、某之稻垣満次郎、又、大石正巳、

又、柴田等、不見模稜跡、收、之、歟

西郷、高島善、態、跡、避、之、廣島、又、某、模、之、西郷、伊藤、金、島

ハ、山縣、見、之、井上、望、獨、利、之、山尾、井上、勝、山口縣、坊、之、

又、此時、長、派、之、收、之、晚、睜、之、板、恒、先、鋒、隊、之、品、川、之、洞、藏、之、

峰、山、之、校、之、實、之、松、方、田、岡、之、先、鋒、隊、之、身、又、之、氣、之、之、

日報評

第十議會、一月之後、逼々風蕭々、氣堂々、弟馬境々

國民張瞻明自抄名因國之聯見人乙子

根本改業。少頃恒實一掃。少頃悉歸。歌心題。

以龍易之說所
龍志并為易之
終自之在常久
而震

鹿子方上第一馬鹿子

難喉中へうずく
 移せし隙伯へ
 寄しりくふしり
 伯を去る
 少當也有一
 篇世方石
 三石森
 自井高
 卷子と成

臨邑編年志
卷之四
地理志
縣志

戦後復興の趨勢に伴ひて勃興する全國幾多の新路線は
 社の諸般線路許可の可否當局者自ら之を断るべき
 或は偏重主義を主張し或は放任主義唱へる一般經濟界と
 種々腹説並に現内閣の實業部と對し手腕を競ひの徒
 然と空論を弄し現今一般經濟上の關係を益々益々
 と許する方針を以ての作を謀るべしと元來政府
 既と國家を交通機關なりとの建設自ら調査し
 幹線が通支線ありと各地の經濟を恢弘し其敷設す

私設銀の許否、銀の移否、其概の一ニ唯二者
 多し所以、銀の元、債務者、其義務の果ヤルを
 候、其資本中三分ノ二、固定資本、残り正貨ハ
 海外に充てん^{（レ）}（^{シ）}（^ル）
 （^{シ）}（^ル）
 在ル、私設後、收支相償^{（レ）}
 する、場合、その収入と、貯蓄と、地方、経済事情、その生産分配上、
 必要に於て、金融、如何に拘ラス、早晩之を許可す、敷設せしむるべからず
 若し然らば、單に他、綿路、妨害、を、出候、若し其目的、數

二十九

抄方正義

中

樺山學記

西御道

龍所爲

修甲
 乃乃
 心
 中
 除
 原
 只
 就
 新

吳昌碩

山清萬壑

少子

今既長

德川家

寫錢諸君

[illegible]

田田溪山
神龍聖帝

島田子

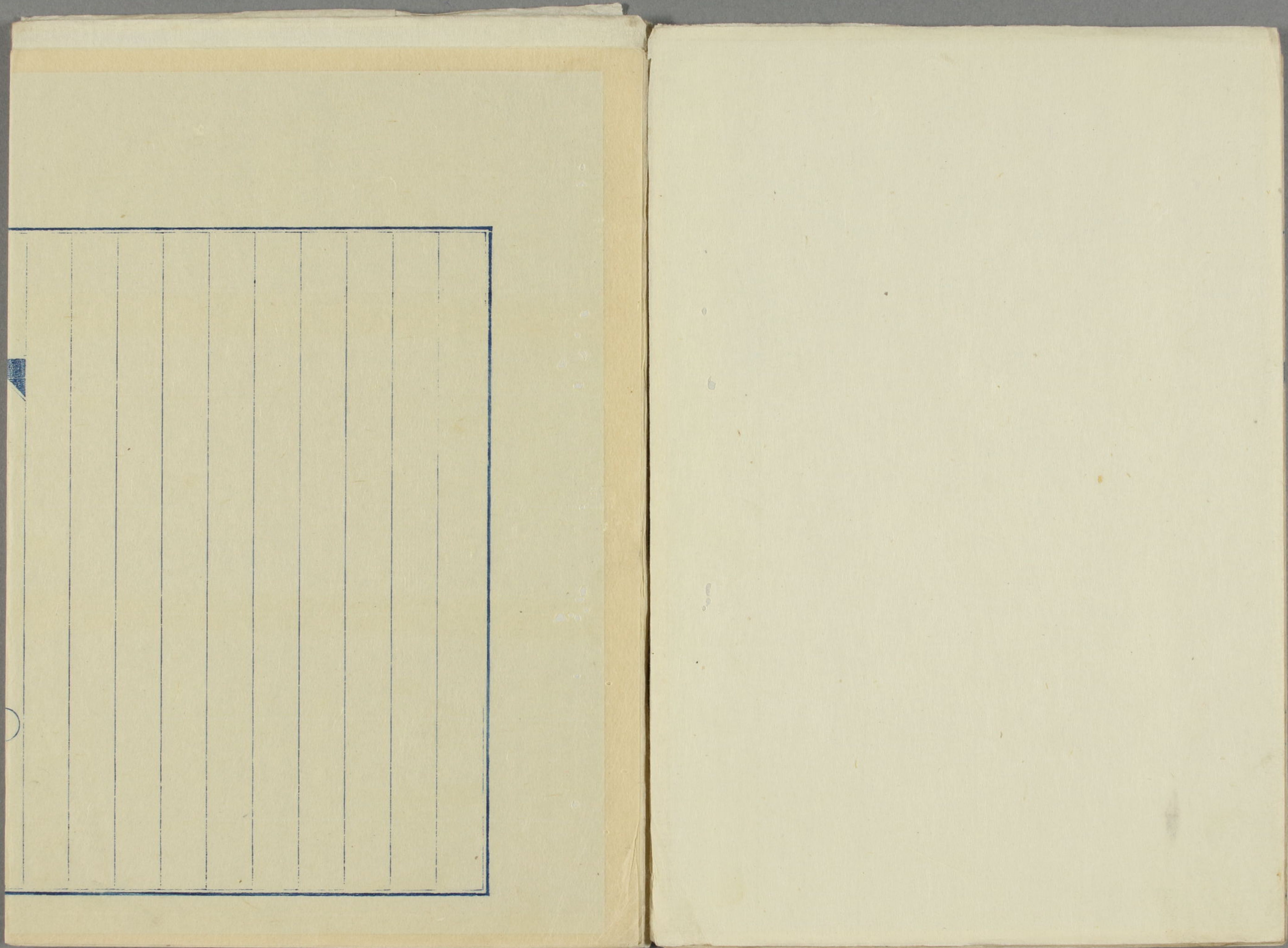
國民革命
信守紀律
人之精神

三冊
再號

壬午年丙申

紀男

養浩堂



訪黑田

訪黑田

三月八日午前黑田訪う。到浦田探梅。西へ使番書儀。
 三月十日山縣侯爵國幣冠式新橋送別。向島豊井探梅。
 十九日大八學校訪歸舎南門。
 廿日春雪雲紫峰頂賀侯國游會井上見。
 廿日登院大山雀、鳥昇風通。謝り。
 廿日曜日本銀行出業式招飲。伊藤、佐理、隈宅焼肴。

訪黑田贈鵲

夜訪黑田

夜訪黑田贈鵲

三月廿日登院前渡邊藏相訪。勸業銀行年々演説。
 廿日登院緊急勸業勸業。伊藤、佐理、隈宅、山縣、
 廿日登院。西へ向延會。勸。
 廿七日登院。
 廿八日登院。係中條侯爵。發せ。委員。秋と特刊。
 廿九日議會。不院式。故。諸。會。松芳原行。
 三十日宮内省。礼。服。用。教。正。位。
 三十日。清。心。使。禮。康。來。山縣大將。若。港。若。出。
 四月一日。西。卿。一。雁。羽。多。謝。中。法。館。中。餘。謝。書。
 二日。小。田。切。懷。齋。お。蘇。式。友。訪。上。中。一。梅。花。初。友。

訪黒田

訪黒田

日

青世接見觀按使軍艦。伊奥の兄は務大臣

二。梅山任松密郎。桂子等位。墨澤江村

言上杉家範調印

黒田任代理経理大臣

黒田任代理経理大臣

黒田任代理経理大臣

黒田任代理経理大臣

黒田任代理経理大臣

訪黒田

訪黒田

訪黒田

訪黒田

訪黒田

十。向のり花屋。都島系。松田。此。三。陸。海。南

十。向のり花屋。都島系。松田。此。三。陸。海。南

六月廿七日。黒田。松田。此。三。陸。海。南

七月。黒田。松田。此。三。陸。海。南

七月十九日。黒田。松田。此。三。陸。海。南

七月十九日。黒田。松田。此。三。陸。海。南

十月廿日曜行德女婚記之世語

廿日

廿日晴勝我初以渡過國政之仍黑面之舞
廿二日晴南境極好德世之婦衣具之好也
廿三日曇德世之婦具之山下贈衣德世之具出衣于婦
廿四日晴法女之山下者一兒舞日本橋里物夜後
廿五日晴上段之乃曇于德世之山下贈衣德世之具出衣于婦
廿六日晴法女之山下者一兒舞日本橋里物夜後
廿七日里山山下婦自甘來歡親親大勝
廿八日晴天行軍南境德世之母口東
廿九日晴天行軍北境甘來歡親親大勝
卅日晴天行軍北境甘來歡親親大勝

古山和泉道人梅

月	日	土	火	日	土
二月	一日	朝評、穀島秘書 宮内省、御禮 貴族院、登 上杉公、 初親族、 川村	赤坂黒田副議長 及、貴族院議長 長大久保、 兩家、伊予藤	貴族院、 始、議席、 第九部、入	黒田、 贈、 此夜、 焼
三月	三日	登院	黒田、 青、 夜、 紅葉館、 細、 細、 清、 佳、 裕、 廣、 子	登院	登院
四月	四日	登院	登院	登院	登院
五月	五日	登院	登院	登院	登院
六月	六日	登院	登院	登院	登院
七月	七日	登院	登院	登院	登院
八月	八日	休院	休院	休院	休院
九月	九日	休院	休院	休院	休院
十月	十日	登院	登院	登院	登院

水 火 月 日 土

日 土 日 土

[illegible]

[illegible]

日 月	日 月	日 月	日 月	日 月	日 月	日 月	日 月	日 月	日 月
金 裕 丸 圓	酒 六 割	酒 六 割	酒 三 割	正 宗 三 割					二 十 九 年
勝 安 芳	竹 添 進 郎	失 火 見 舞	蕎 麥 三 七	黑 田 伯 火 事 見 舞					贈 答 所
二 十 五 山	酒 六 割	岩 倉 公							
番 町 長 政	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								
	目 黒 忠 利								
	千 坂 高 雅								
	酒 三 割								
	岩 倉 公								

二月 八日	二月 四日	一月 廿一日	一月 十五日	一月 九日	三月 十一日	五月 五日	七月 二日
文者一臺	鷄卵大折	鯉札三四	滑子一罐	友深 縮帛 三五	清酒圓本黃石	壹田保科忠節	寒山上杉極
吉井幸藏錦倉	牧野仲顯	高頭忠造	片山仁郎	鹽鞋平	鶴印所福井松節鍋一枚瀧川常市	拾田實道五錢川端遠塩鞋平下條履	今里并陽部
		蒲萄酒三瓶立元 大々 樽茶	小鯛十萬頭忠造	黒留清隆成			今古藤久米
							壹田柿崎家係
							今第州夫人

清江信史
飯洲七言
紹興

[illegible]

廿九年

五月二十七日

轉任任內務大臣

六月一日	大隈伯佐賀藩主陸奥伯有言依願免官前宣礼還賜小		
八月二日	松方伯鹿兒島歸拜謁	伊藤首相大藏行	
八月三日	首相西鄉海相意行命	伊藤大藏行	
八月四日	桂總督臺内文友	海防面相内	黑田總理代理命
八月五日	伊藤首相臺内午後出及首相大藏伯		
八月六日	西鄉海相出及伊藤京井上伯神戶各興津會合		英使 英國旗船 廿五午後出帆吳港向
八月七日	小村朝鮮公使着神戸泊	伊藤西鄉泊臺内	未ヨリ芝罘向
八月八日	小村朝鮮公使后朝東京向	非修更非伊及西國者井上伯指願迄	
八月九日			
八月十日			

伊香、
帰京

八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	一月	十月	九月	八月
伊藤首相大磯行 井上伯録倉、帰京	伏見宮露園、御帰京 千葉青森山梨三 重警急、伏見徳島	首相参内上奏、午後 板垣内相高島松植相、訪	芳川法相鎌倉、帰京	大山陸相沼津、帰京	首相伊豆、伊會議 黒田、大山、西郷、板 垣、高島等、松隈、	首相大磯行、此行、尋常、避暑、アラスカ	自由黨林河野大磯行	黒田、板垣、榎本、芳川、三、相、會、議、	林河野等、帰京、限、伯、入、 閣、防禦、運動、絶、對、拒、絶、 高島、松、相、三、面、松、方、 訪、問、	主米、後、李、範、晉、樞、密、

八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	一月	十月	九月	八月
伊藤首相大磯行 榎本、高島、芳川、大磯行	高島、松、相、三、面、松、方、 訪、問、	高島、板垣、二、相、大、 磯、伊藤、訪、	松方、伯、早、天、山、縣、侯、 侯、南、禪、寺、訪、	松方、伯、早、天、山、縣、侯、 談、熟、シ、タ、此、方、和、密、長、電、其、以、来、リ、タ、リ、ト	板垣、後、黒田、訪、	板垣、再、大磯、首、相、 伊藤、訪、問、	松方、伯、京、都、入、	伊藤首相大磯、 訪、	伊藤首相大磯、 訪、	伊藤首相大磯、 訪、

大雨 白島 洪水

九月十日	土日月	主日月	主日月	西日月	五日月	六日月	七日月	八日月	九日月
松方伯自山縣訪之宮中伺便入時未退 午後四時松方伯山縣西鄉團圓井上樺山高島相會凡此時間當議疑山縣歸印後芳村根三直指鷄鳴吹評清	松方伯八刻八時 西鄉自印訪 大山自印訪					縣島程准黑田仙題字於此處	皆六木境所經乃為大水技下之七降天々黒田仙訪也 四内院希斯重ノミヤモ	松方伯任總理大臣	永田新総理官宅旁大隈樺山高島西郷云々

九月 廿日	樺山伯任內務大臣 高島忠義陸軍大臣
----------	----------------------

樺山伯任內務大臣
高島子兼陸軍大臣

廿
日月

廿月

日月

日月

日月

日月

其九月

午後五時李鴻章抵瀕着九時三十分爲利子出帆

日月

日月

二月

黒田議長脱走劇

日月

日月

八月

黑田淑長一讀有小異

九月

朝鮮駐劄原案

十月

日月

日月

日月

日月

日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月
						三月十日	七日	午後三時	
						石井	二	九	

三月十日 午後三時
石井 二 九

日
土月七日 富田曰ク 官有入 伊藤源河内 町に 不塔 是ヨリ 出ガレシヤ

八日 日本ニ 廿六世紀 雜誌ヲ 掲載

十日 日本 取消

土日

十日 土方 在 樺山 相ヲ 訪

十日

与 膳 宮本 木村 等 十末 縦 游

土 十四日

開花楼友子會平田子印解了

日 十五日 松方樺山訪黒田

予訪黒田伯曰り后朝樺山少訪名悪

十六日

訪園子坂

十七日

十八日

勝と尋ね

十九日

廿日

土 廿一日 新聞停紙

廿九年

土 月

十四日 訪黒田

十五日 訪勝田

十九日 樺山官宅あり田刈盛書入り

松方永田所官宅あり

二十日 訪樺山御倉

二十日 世記

二十日 世記

二十日 世記

二十日 世記

